

断章 8 食卓②

川鍋 さく

梅雨が始まり、雨の日が七日続いている。昨日はぎーぎーと川が流れているような雨音を、今日はぴちゃぴちゃと滴る雨音を聴きながら目を覚ました。雨の音を聴いていると、いろんなことが許されるような感覚になる。心や身に纏わりついた不安や不満、焦りや自己嫌悪や不快感が、洗い流されるような感覚。耳に入ってくる雨の音に意識を向け始めると、「そろそろ起きなきゃ」「動かなきゃ」「何かしきゃ」……そんな言葉を何百個もぶら下げながら回転している思考の速度が徐々に落ちていき、その遠心力による負荷が軽くなっていく。やがてそつと思考の回転が止まると、自分の呼吸がとても浅く不規則になっていることに気付く。その瞬間、「少なくとも今この時は、ただゆっくり呼吸ができれば、それでいいや」と考える。だから雨は好き。ただ、高い湿度でべたつくような暑さと、いつにも増して髪の毛がいうことを聞かなくなるのがどうにも嫌だ。

今日は母も仕事がないようで、食卓でせんべいを齧りながら、録画していた『大改造!! 劇的ビフォーアフター』をのんびり観ている。でも途中で座ったまま居眠りをしてしまい、番組が終わってテレビの画面が録画リスト一覧に戻った頃に目を覚まし、もう一度はじめてから再生する。そして見覚えのあるところを早送りして、「この辺で寝ちゃったんだよな」というところで早送りを止めて視聴を再開する。ところが、十分、十五分程するとまたうつらうつらと舟を漕ぎはじめ、再び目を覚ました頃には、テレビの画面は録画一覧に戻っている。三周目か四周目で、やっと番組を最後まで観切ることができる。母の予定のない休日の過ごし方は、だいたいこんな感じだ。わたしが居眠りしている母に声を掛けて起こす時もあるけれど、それでも結局また居眠りしてしまうので、母の眠気が自然に覚めるまでそつとしておくことが多い。今日は番組再生を三周したところで、「あー、だめだ。絶対同じところで寝ちゃう。ちよつと一回横になろう。」と言って、ベッドに入ってしまった。すぐに小さな寝息が聞こえはじめ、少しするとしつかりとした鼾が聞こえてきた。母は昔から鼾をかきやすい。ここ何年かは、寝ている最中、何秒か呼吸が止まっているようなことが時々あるので、睡眠時無呼吸症候群ではと心配になる。たまに夜中、母の鼾や寝息が聞こえずやけに静かだなと思うと、こっそり母の枕元に行って、ちゃんと息をしているか確認したりしている。本人にも何度かそのことを話し、「それやばいかも!」と何となくの危機感を持っているものの、それも今や日常の一部として慣れた状況になってしまっている。

四十分程して、母がむくりと起き上がり「あー、寝たわ! すっきりした!」と言い

ながら食卓に戻って来た。わたしがキッチンのお菓子の引き出しを開けながら「紅茶淹れたら飲む？」と聞くと、母は「飲む飲むー！」と楽しげな声で答えた。母のいつものテンションに少し安心しながら、わたしはケトルのスイッチを入れ、ティーバッグを二つ取り出した。紅茶を淹れ終え、わたしにとってはおやつ兼朝ごはんのチョコレートとビスケット菓子を出し、母と一緒に『ビフォーアフター』を最初から観直した。私はこの番組が特別好きなわけではないけれど、母とふたりで過ごすこの休日の時間がとても心地良かった。

夜、お風呂上りの母が、また「ごめん、ちょっと背中さすってくんない？」と頼んできた。わたしはその依頼には快諾しつつも、怪訝な表情になるのを抑えられなかった。母がそれを言うのは、今週中でこれが三回目だったから。いくら何でも頻度が多い。母がわたしに自分からマッサージ等を頼んでくるのは、よほど凝りや疲れがしんどい時だ。癖になって必要以上に私に甘えてくるような人ではない。だから、こんなに頻繁に私に頼む程背中や腰が痛くなるのは、ただ疲れが溜まっているというわけではなく、何か異常事態だと思った。マッサージをしながら、わたしは少し強めの口調で「明日仕事なかったら、病院行った方がいいよ。ちょっと痛くなる頻度がおかしいもん。」と母に言った。母は「はあ、病院か。そうだなあ。」と、渋々という感じで答えた。母は昔から病院に行くのを嫌がる。その理由は、お金が掛かるから。決してゆとりのある収入ではないから、普段から「何かあった時のためのお金」は確保できていない。そして母は、風邪をひいたり体調が大きく崩れることがほとんどない。少し調子が悪くなることがあっても、たいてい一日寝て休めば回復し、病院に行かずに済むことがほとんどだった。だから、自分はなるべく病院に行かずお金を掛けずに済ませたいと思っている。もうひとつ。病院に行って、万が一大きな病気が見つかったら嫌だという考えを母は持っている。過去に会社で健康診断を受けるよう指示があったときも、費用は会社負担だから掛からないのに、かなり渋々行っていた。実は近頃この背中や腰の痛みについても、私が病院に行くよう勧めるのはこれが二回目なのだ。さすがに今回は母も自分の体に異常を感じているようで、「明日休みだったらとりあえず整形外科に行ってみるか。」と言った。

母の背中の痛みが落ち着いて就寝し、私もシャワーを浴びて寝支度をし、ベッドに入った。けれどもどうにも心が落ち着かず、タブレットを開いた。普段元気でめったに体調を崩さない母の、今までとは様子の違う不調に、不安を感じずにはいられなかった。とくに母は他人よりも痛みに強いらしく、十五年ほど前に腹膜炎になった時も悪化するまで痛みを我慢できてしまっていた、という事がある。そんな母が「痛い」と口にするのだから、よほどの事なのではないか。何か命に関わる深刻な病気だったらどうしよう……。わたしはタブレットで「背中や腰が痛い 原因」と検索しようと

思いワードを入力した。けれども、今の自分がむやみにネットの情報を漁っても、精神的によくない影響を受けるだけだと思い、入力したワードを消してタブレットを閉じた。素人の自分があればこれ不確定な情報を集めるより、早ければ明日には病院に行って何らかの結果が分かるのだから。わたしはベッドの中で仰向けに姿勢を正し、両手を組んだ。そして瞼を閉じ、一度深呼吸をして、頭の中で言葉を唱えた。

「神様、仏様、おじいちゃん、おばあちゃん、ご先祖の皆様。他にも守護してくれて
いる全ての皆さん。いつも見守り、応援ありがとうございます。母の不調の原因が、
命に関わるような深刻な病気などではなく、なるべくすぐに治るものでありますように。
これからも、私の大切な愛する存在をお守りください。私からも、私の大切な愛
する全ての存在に、愛の加護を。」

物心ついた頃から、夜寝る前に、ほとんど毎回しているお祈り。家族もわたし自身も、特定の宗教を信仰しているわけではなかったけれど、何がきっかけだったのか、私には寝る前にお祈りをするという習慣が身についていた。恥ずかしいので、他の誰かにこの事を明かしたことはない。母にだけ、一度か二度、話題の流れで言ったことがあるだけだ。根拠はないけれど、目に見えないものの力とうのは確実に存在している
と思うていて、自分の祈りも、微力ながら何かを守る力の一部として影響力を持つ
はずだと信じてきた。だからこどもの頃から、寝落ちするほど疲れているとか体調が
悪い時を除いて、ほとんど毎晩、自己流ながらお祈りをしている。とくに不安な事や
強い恐れのある時は、祈りの内容をより具体的にしてお祈りして何度も繰り返し唱えた。
この日も、眠くなるまで繰り返し唱えた。